

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ(一八)

第五則 清源米価

〔示衆〕

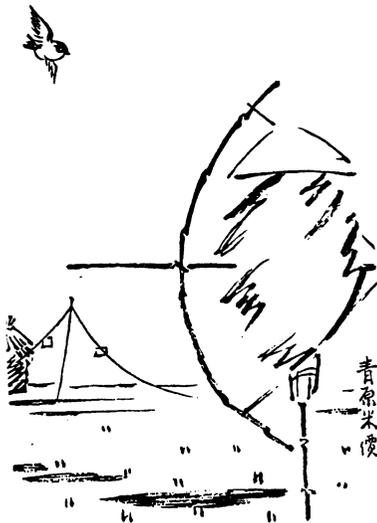
衆に示して云く、闍提は肉を割いて親に供するも、孝子の伝に入らず、調達は山を推して仏を庄するも、豈に忽雷の鳴るを恐れんや。荆棘林を過得し、梅檀林を斫倒して、直に年窮歳尽を待つも、旧に依って孟春なお寒し。仏の法身、甚麽の処にかあ

る。

〔本則〕
 挙す、僧、清源に問う、いかなるかかこれ仏法の大意。「小宮は多く律を念う。」源云く、廬陵の米、作麼の価いぞ。「老将は兵を論ぜず。」

今回は、青原行思禅師に関する有名な古則です。『従容録』には、青原に関する則はただこの一則だけを収めます。青原行思禅師(六七三〜七四一)は、盛唐時代の人で廬陵(江西省吉安市廬陵県)の出身。禅門六祖の慧能禅師から大法をうけ、故郷の廬陵青原山(清源山とも)に道場を開いて靖居寺とし、門下に石頭希遷という英傑を打ち出しました。のちに唐末から宋初にかけて、石頭の門下からは法眼・曹洞・雲門という禅の三宗が栄えることになりましたが、それによってこの三宗派は「青原下」と呼ばれるようになり、したがって、行思禅師は歴史上すこぶる重要な地位におかれています。

ところで、禅師の開いた道場は、現在では青原山にある静居寺がそれで、全山文字どおり青原の小高い山のふもとに多くの伽藍が立ち並んでいます。わたくしが訪れた一九八二年九月には、見る影もなく荒れはてていましたが、最近はかなり修復されて、住僧もいると報ぜられています。こんな予備知識をもとに、本文をみましょう。まず、万松和尚の「示衆」を例によって意識します。



「ジュシャ太子は自身の肉をさ
いて飢えた父母に与えたが、孝子
伝には入っておらん。ダイバはブツ
ダに石を投げつけて傷を負わせた
が、極刑にはされなんだ。極悪の
イバラの林を通りぬけ、すばらし
いセンダンの木を切りたおして大
晦日になろうとも、やはり元日の



荒廃の静居寺大雄宝殿（1982年当時）

風は寒い。ほとけさんのほんとう
のいのちが、どこにあるかわわか
りかな。」といったほどの意味で
す。味わい深いですね。

闍提とはジュシャ太子のことで、
賊のために父母と外国に逃げたが
道に迷い飢えた。そこで太子は自
身の肉をさいて両親に与えたとい
う経典の中の説話。また、調達す

なわちダイバダツタがブツダに対
してさまざまな危害を加えた話し
は有名です。問題は、こんな極善
や極悪とみられる行為が、いずれ
も絶対的な善悪ではないというこ
とです。

なぜなら、そんな極悪のイバラ
をものりこえ、極善のセンダンも
やつつけてこそ、はじめて元日の
風はやはり寒いという当然の大事
実が会得されるからだ、というの
です。万松は、それが仏のいのち
のありさまだと教えているのです。
つまり、仏さんの世界は、是非善
悪をこえた絶対的な心の世界だと
いうのですね。

この万松の「示衆」は、宏智の
「本則」に対する見解なのです。
そこで「本則」です。

僧が青原禪師に問うた。「仏法
の根本精神は何ですか。」青原
「いま、廬陵の米はいくらかね。」
いやはや、木に竹をついだとは

このことです。実に短いやりとり
これが古今の名句とされているの
です。仏教のことをいわず、俗の
俗の米相場とは、面白いですね。

万松のコメントは的格です。僧
の問いに対しては「小役人は融通
がきかんワイ」と皮肉り、青原の
答えに対しては「老古仏の対応は
さすがに自由自在だワイ」と賞讃

しています。

いうまでもありません。青原は
僧が仏法を何か特殊な世界のもの
と勤ちがいでしていることをみてと
り、あえてそんな観念のとらわれ
をたたきつぶすために、地元の米
の相場という、もっとも卑俗なこ
とばをぶつつけたのです。僧のショ
ックが目に見えるようです。これ
は、ちょうど百年ぐら以後の白
樂天が鳥窠道林禪師に対して同じ
「仏法の大意」を問い、「諸悪莫作
衆善奉行」、つまり「悪いことを
せんで、善いことをしなされ」と
教えられ、「そんなことは七つの子
供でも知っていますよ」と答え
ると、「七つの子供が知っておっ
ても、八〇の老人でも仲々できん
ぞ」とたしなめられた有名な故事
と似ています。

青原も鳥窠も、ともに仏法は観
念の遊戯ではなく、卑近な生活の
中にあることを教えているのです。

廬陵のあたりは、どこまで行っ
ても田んぼまた田んぼの米作地帯。
青原のころの禅道場では、みな雲
水たちが水田をみずから耕作し、
自給していました。したがって、
米作を媒介として地元の人びとと
は、治水・灌漑・農具・労働者な
どの点で密接なかわりを持ち、
地元の人びとは、道場の伽藍や

生活のすみずみにわたって微妙な
影響を与えていたはずであり、けっ
して無関心ではいられない問題で
した。禅修行というものを、特殊
な環境で特殊な人たちが特殊な行
をするもの、と考えることほど誤っ
た考えはありません。

むかしの道場ですらそうですか
ら、ましてや現代の禅はいっそう
生活とのかかわりが深いことは、
いうまでもありません。あらゆる
環境や職場や家庭にあっても、まっ
しぐらに道を求める姿勢であれば、
つねにどこでも道場であることを、
「直心これ道場」といいます。青
原の「米の値はいくらかね」は、
卑近で世俗的な事柄にもいくらで
も真理はあるのだ、と教えたこと
ばでした。

仏法概念化や観念化を禅はもっ
ともきらいませぬ。そこから脱却し、
ハダカにならなければ、けっして
真理は体得できません。

いまの日本では、世界各地の米
が店頭に並び、価もマチマチです。
味との関係も一概ではありません。
人間の価値観はみなちがうからで
す。仏法も同じ。各人自分の仏法
があつてよいのです。正伝の坐禅
にさえつちかわれているならば。

（山主）

二祖慧可大師の耳 (その一)

雪舟筆「慧可断臂図」雑感

松戸市 小畑 節朗

先年(一九八七年)「日本の水墨画」という展覧会が、東京国立博物館で開かれ、別図写真にある雪舟筆「慧可断臂図」が出品された。愛知県齋年寺に伝来した名画を眼の当りに見て感動したことを昨日のように思い出される。

テーマである「慧可断臂」であるが、ご承知のように達摩大師がインドより西来して、中国に至り少林に坐す。二祖慧可大師がこれを聞いて、雪中に求法の時、自ら左の臂を断って、その決意を示すという、求道の因縁の劇的場面を描いたものである。

この「二祖断臂」は禅宗の信仰の上で「世尊拈華、迦葉破顔微笑」と共に伝法の最重要の説話であることは古来より言うをまたない。

道元禅師は、『正法眼蔵』行持の巻(下)で二祖が達摩大師に求法のことを感動を込めて、

「十二月初九秋といふ。天大いに雨雪ならずとも、深山高峰の冬の夜は、おもしろいやるに人物の窓前に立地すべきにあらず、竹節なお破す、おそれつべき時候なり」

「この夜ねぶらす、坐せず、やすむことなし。堅立不動にして、あくるをまつに、夜雪なさけなきがごとし。ややつもりて腰をうずむあひだ、おつるなみだ滴々こぼる。なみだをみるに、なみだをかさぬ、身をかへりみて身をかへりみる。」

と宗教書『正法眼蔵』では珍しく、禅師ご自身の感情移入をあえてなして、感激の言葉で垂示しておられる。『修証義』にも採られて有名な、

「その報謝は余外の法はあたるべからず……。ただまさに日々の行持その報謝の正道なるべし。」以下の一段が後に続くのである。

さて、この構図を見ると、真横向きの二人の人物が画面いっぱいに描かれて、達摩大師は岩壁に向って坐し、その後二祖が、自ら断った左臂を持って、あたかも別時限に居る如く、「堅立不動にして」立っている。

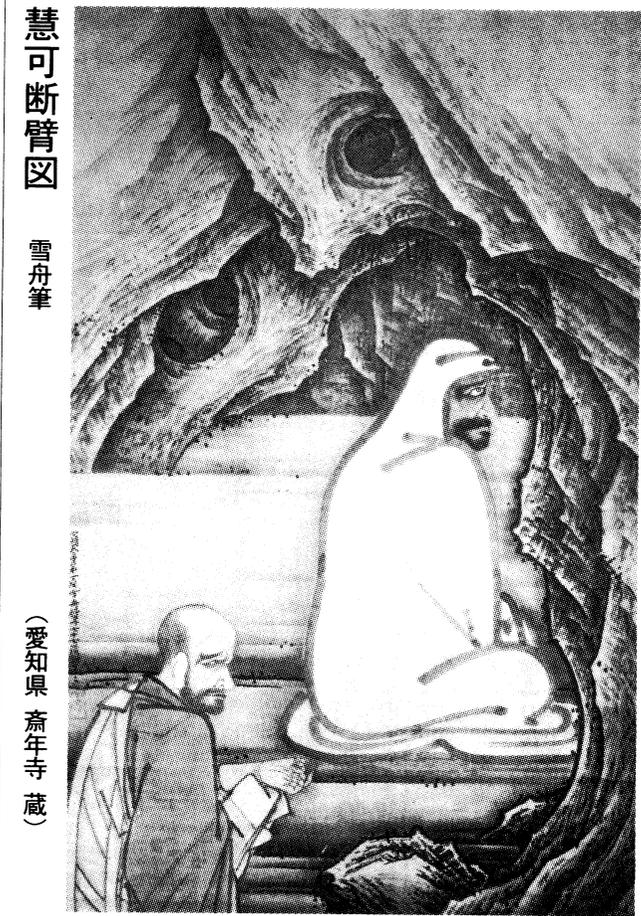
二祖の眼は坐禅の経行けいぎんの時にように、想定出来る背の高さ程先の下を見つめている。

達摩大師の眼は上を見て、岩壁の先の別の空間を見ているようであり、現在、坐禅を行じる時の目の位置(下前方に眼を落す)とは違っている。一点を睨んで、口を閉じているのは、あたかも次の言葉を発しようとする瞬間とも思える。

伝燈録による達摩大師の言は、「諸仏最初に道を求む。法の為に形を忘る。汝今臂を吾前に断つ。求むること亦可なること在り。」であった。

静寂のうちに、緊迫した心理劇を今、比処に現出せしめている場面である。

—つづく—



慧可断臂図

雪舟筆

(愛知県 齋年寺蔵)



感動裡に会友追善法要挙行さる

△ご冥福を心より
お祈り申し上げます▽
清水利一様 森 正様
中川俊二様 染谷はる様

龍泉院参禅会発足以来、上記の方々が逝去され、その方々をご供養させていただくべく、昨年十一月六日龍泉院本堂において、会友追善法要が挙行されました。

椎名老師お導きのもとに、ご遺族（中川様、染谷様）と参禅会代表の高間様以下会友三十名が集まりました。法要は椎名老師を導師として、副堂、送迎等の役は全て会友によって行われ、まさに参禅会挙げてのまごころ一杯の法要となりました。

法要の後は、記念撮影、中食、茶話会。茶話会では全会友より、物故者各位を偲んでの思いが吐露され、更に椎名老師、「遺族の方々のお言葉が述べられると、さしもの広い大悲殿の広い座敷一杯にも感動的な雰囲気気が広がりました。椎名老師のお導きのありがたさは、ものごとの本義を常に心で感じ取らせていただけることにあると思います。今法要も物故者各位と共に、私達参加者全員に

とっっても供養していただいたと感
じ入っております。

追善法要の行われたこの日、感謝と共に仏道精進の節づけとさせ

心に残る言葉

☆人に喜びを与えることが、最高である。

感謝することが、喜びを与えることである。

☆人間として成長するためなら、誰にも遠慮はいらぬ。生きるかぎり成長することです。

それは、あらゆるものに手を合わせて、拜んでゆくことです。

☆けしからんと怒るよりも、気の毒だなあとゆるしてあげなさい。

「生きよう今日も喜んで」
平沢興語録より

平沢先生のおっしゃるような心境に、早くなりたいと思います。

今春の二月二十日は長閑な四月の暖かさでした。ポカポカ陽気に誘われ柴又帝釈天にお参りし、矢切りの渡し場まで足を延ばしました。今まで気付かなかったのですが、帝釈天の境内に次のような碑が建っておりましてご紹介し

ていただきたいものと思います。



沼南町 宮本 茂

ます。ちょっと分かりづらい所に建っているのであまり知られていないようです。

遺す言葉

死生、命ありだ。くよくよすることとは一つもない。お前も父の血をうけついでいるのだから、心は弱く、涙もろいかも知れぬが、人生に対する抵抗力だけは持っているだろう。あとは千変万化だ。運命の神様はときどき妙なはずらをする。しかしそこでくじけるな。くじけたら最後だ。堂々とゆけ。中道にして倒れたところで、いいではないか。見るよ、高い山から谷底見れば、瓜やなすびの花ざかりだ。父は爛々たる眼を輝かして、大地の底から、お前の前途を見まもってやってやるぞ。

尾崎士郎



感応道交を期しての

《第十一回》

成道会

昨年十二月五日、釈尊に感謝しての成道会が、龍泉院本堂において行なわれました。

当日は報恩坐禅、成道会、法話茶話会の順で進行。椎名老師を導師として、六名の会友が、副堂、維那等のお役を務められました。

法話に先立ち、椎名老師より、参禅会に二十年間貢献されてこられた幹事の小畑様に対し記念品の授与式が行なわれました。

参禅会代表の高間様を始め私たち一同もまさに同慶のいたりであり、改めて小畑様の長年のご努力に感謝申し上げたいと思います。

法話では、椎名老師より、釈尊が成道し、仏教が始まった由来。仏教によって「外に向って求めることなかれ。外に求めれば全て苦なり」との内観の法が確立。内観法で人生を達観する大切さを。

また、正しい坐禅修行をしているかどうかは、自分の周囲の人々はどう変ったかの認識から判断。三年以上修行していれば、家族も安心を得て幸せの状態でなければならぬといのご垂示を賜りました。

更に感応道交についてのご垂示。

道元禪師より「人のために生きなければ人ではない」とお教え賜わる仏の世界。それを体現、影響しあうことが感応道交であること。

胃癌であることを隠している家族と、知らぬふりをしながらそれを知っていた某老師。白血病で亡くなった由利ちゃんと両親。椎名老師と老師の父上様等、深い家族愛の実例を挙げられて、感応道交についてお話しくださいました。

殊に由利ちゃんが十六才の短い生涯を終える時、両親にかけた「こんなに大切にしてもらってありがとう。幸せでした。」との言葉。また「子供は神様だった」と思う由利ちゃんの両親との話しは大変感動的でした。

毎年行なわれる成道会ですが、必ず新たな感動があります。それは椎名老師が私たち一人一人に心を砕かれた上でお話しくださるのでも、そうなるのだと思います。昨年もそうでした。

昨年お教えいただいた感応道交は、双方がまことを尽し切るることによって初めて生ずるものと思います。更なる坐禅修行を誓って。

課題のない先に何が見える

我孫子市 三町 勲

「分からんままに生きてきた、もとの命にかえりなさい」とは、玉城康四郎先生の一生をかけた究道者の凝縮された仏の道の言葉であります。これ程、簡単な言葉はないと思いますが、またこれ程奥の深い言葉はありません。

昨年の夏のことですが、四十年近い勤めの世界を退きました。母親にそのむねを報告したところ、「これから信仰三昧の生活ができますね」の母の言葉に対し返事に困りました。誰も何れは退職するものであり、誰も死ぬものであると知りながら、誰もその場に直面しないと実感しないものです。何かしら心のとまどいをかくしきれません。死に直面すればもっと大変なことでしょう。その私に淡々と「信仰三昧の生活ができるではないか」と言ってくれる母親は、毎朝、自分の息子や嫁や孫達あわせて二十四人のために仏様にお祈りをしているというのです。私は、時々よそ様の悲しい不幸なお話を聞くにつけ、母親が毎日私達のために祈ってくれているので、これまで何事もなく過してこれたの

だと感謝するのです。

この半年の間のとまどいや迷いの中にあつて、冒頭の玉城先生の見性の言葉をお聞きしたので。先生は、華嚴宗での聞即信と臨済禅で身体を通しての究道を現在に至るまで続けてこられました。その究道の厳しい路のりの中にあつて、六十歳になつてお悟りを開かれたのです。それが釈尊のお悟りになつた時の「明け方の詩」との出会いだそうです。

「実(まこと)にダンマ(法)が熱心に禅定に入っている修行者(ゴータマ)に頭わになるとき、そのとき一功の疑惑は消滅する。あたかも太陽が虚空を照らすように、悪魔の軍隊を粉碎して安らつてゐる」ーウダーナ(自説教)ー

先生は二十六歳の時を初めとして何回か見性のご経験がおありだそうですが、これが悟りだと確信をもたれたのは、この詩をお読みになつた時なのです。

この詩の中から見性を認識するためには、私達一人一人が業熟体であることを理解しなければなりません。つまり、私達は無限の過

去から生れかわり、死にかわり、死にかわり生れかわり、その間に生れるものがありとしてあらゆるものとまじわり、今ここに現れている個人(自分)全体のエッセンス(本質)なのです。つきつめてゆくと、私達自身は宇宙協同体であり、宇宙そのものの姿なのです。

宇宙の誕生以来、宇宙から何も分らないまま生れたのです。まさに無明であり、何にも分からないために色々と苦しむ現実体なのです。だから冒頭の先生の言葉にあるように、我執の自分から離れて、「分からんままに生きてきた、もとの命にかえりなさい」ということになるのです。実に明(迷)解ではないでしょうか。

私達の毎月一回の参禅会もひたすらこの根源を極めようとしている道なのです。それぞれの姿、型、心の持ちようは違ってはいますが、坐蒲を通して大地である宇宙と一体になつた時に「もとの命」にかへつていけるのではないのでしょうか。

「もとの命」とは「命の中の命」とも「純粹生命」とも言われているダンマと一体になることであり、私は人間の生命の根源である宇宙と一体になると考えると分かり易いと思います。

このように考えますと、参禅にも一段と励みが出てきて、日々の生活も安心の極地に近づくと思われまふ。そして、世に言う「第一線から引退した」課題のない私に、ほのぼのとした光明のようなものを与えてくれるのです。母親の「信仰三昧の生活が待っているではないか」と言う言葉、玉城先生の「もとの命にかえりなさい」と言う言葉が、人間としての最後の生き方に新たな課題とエネルギーを与えてくれそうです。ご老師有難う。玉城先生有難う。参禅会の皆様有難う。お袋さん有難う。世の中の皆様有難う。どんなに大声で有難うと叫んでも、ありがたさの気持ちはつるばかりです。有難う。ー合掌ー

彼岸の入りを前にして

柏市 安本小太郎



会社生活もあと三年となり、六十歳で定年になったら、仏道の中

心とした生活を、と思っ
て、余分なるものは、少
しでも切捨てた方が良
いとは思っているのだ
が。

今回の人事移動で、一
段と責任の無い立場に
変わった。給与も九万
円位のダウンとなり、
仕事も補助的で、やっ
ても他人の評価を上げ
るだけとなる。

かかる縁に出合っ
て、自分の心理が情け
ないことに仏の教の通
りだ。

五欲のうちの財欲に
属する給与のダウンの
方は、さほど気になら
ないが、次の名譽欲に
関する地位の低下。こ
れが始末に悪い。だ
んと薄れては来るもの
の道を歩いているも、
食事をしているも、
坐禅中は勿論時はず
つと或いはジワジワと
出て来て、ついでは
後悔迄引出して、自
分で卑屈になっ

いるのが判る。

実に、無智とは嫌な
ものだ。

唯識仏教では心の本
体は八つあるという。
そのうち第七末那識
が自我意識の正体で、
おまけに我癡、我見、
我慢、我愛の四つの煩
悩を常に伴って、無始
以来恒に審に働き続
けている。この為、有
情の内心は擾濁され
て、六道を輪廻して出
離することが出来な
いとされている。

この識は潜在意識
で、直接には知られ
ないが、第六意を動か
して表面化して来る。
今回の人事移動も末
那識の存在を自覚させ
られた一件となった。

幸いにして仏教に出
会わせて頂いている。
このような縁はより教
えが身にみるので、
仏道に精進し、自分を
深めたいと思っ
ている。明日は春の
彼岸の入りである。

インド僻村の小学校を訪ねて

印西町 藤原 公

マイソール大学の青年
医師達と僻村小学校を
訪ねた。ジープでマイ
ソール市から約九十
キロ、起伏が激しく
雨水に洗われ流され
た悪路を西ガート山
脈の麓まで激しく揺
られながらたどり着
いた。小学校

はコの字形に建てら
れ、まるで木立の中の
林間学校のようなだ
った。先生三人に生
徒百六十人、そのうち
五十人の生徒と先生
は日夜を共にしている。

丁度、昼食時間であ
った。お祈

りを終え、白衣の高
学年生徒は穀類の煮
たものと味付けのカ
レーを配って回った。
生徒達は清めた手
で料理の感触を味
わい、口にして味
覚と空腹を満たし
ていた。平和財団
からの米のご飯も
配られた。この地
主産のラジとい
う穀物の団子も
配られた。そして
最後にはサツマイ
モも配られた。食
欲旺盛な生徒にと
っては最も幸せな
時間である。



小学校の給食風景

住民は純朴で人懐
っこい人達であるが、
ダムの建設で在来
の農地を奪われ、生
活の場は強制的に山
麓斜面に押し上げ
られた。荒地での
農業は総ての生活
を変え、貧しさだけ
が残った。大半が
文盲で生活手段の近
代化も難しい。しか
し、子供達は将来
に可能性がある。生
活を豊にする活力
になるかも知れ
ない。こんな思
いが医師達を慈

善活動に向かわし
めたという。それは
思想でもない、ただ
何かに駆り立てら
れたようだと院長
先生はいう。診療
の合間を見て医
師達が耕作を学
び、空き地を生
徒と共に耕して
サツマイモを作
った。医師達は
援助を海外にも
訴え、村民の生
活向上を模索し
ている。

食事を終えて戸外
にた子供達は別
人のようにはしゃ
いでいた。小石で
バドミントンの
ような遊びをし
ていた。私が出
ると子供達は寄
ってきた。お腹
は一杯かと尋ね
ると、臍が見え
るお腹を叩きな
がら満足の笑顔
を誇らしげに見
せた。何が無く
ても子供達は純
真で、学校生活
に幸せを感じて
いるようだった。

別れを告げて走
るジープを子供
達は追いかけて、
手を振って送っ
てくれた。院長
先生は危険な悪
路で片手を振っ
て一々応えてい
た。

この日、多くの
村人も会った
が、院長先生は
一度も愛想笑
いを見せなかつ
た。村人は彼を
信じ切っており
彼もそれに応
えている。彼
には慈善の言
葉が見えず、
生活そのもので
あった。無給
派遣医師の期
間が過ぎて、
彼はこの地を
離れることが
できないかも知
れない、と私は
思った。

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）
- 一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅
経行鐘 二声 経行
放禅鐘 一声 放禅
- 一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く
講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師
平成五年度七月より「無情説法」の巻を提唱
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅
月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月四日）
釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（中は座談の司会者。）

平成五年

・一〇月二四日 二八名

（井之輪進氏）

・会友追善法要

一一月六日 会友二六名

遺族二名

法要幹事 中畠宏誠氏

宮本 茂氏

導師 椎名 老師

代表挨拶 高間利介氏

総司会 小畑節朗氏

写真撮影 杉浦上太郎

・一一月二八日 二二名

（徳山 浩氏）

・第一一回成道会

一二月五日 二四名

成道会幹事 中畠宏誠氏

宮本 茂氏

導師 椎名 老師

・一二月二六日 二五名

（三町 勲氏）

・一二月二三日 二〇名

（小畑節朗氏）

・新年会 一一名

一二月一三日 （於・芳野屋）

・一二月二七日 二三名

（清水秀男氏）

・三月二七日 二五名

（三町 勲氏）

▼一月は年番幹事さんの交替の時。昨年、大変お世話になりました、中畠宏誠氏、宮本茂氏から、パトナタッチされたのは、寺田哲朗氏と安本小太郎氏。旧幹事さんには心より感謝申し上げます、新幹事さんには、よろしくお世話の程一重にお願い申し上げます。また木版係は中畠宏誠氏がお努めくださることにになりました。

▼椎名老師は、毎年宗門の年間行事となっている慈善比鉢に出席。昨年一二月四日に実施された時のお話し。つい最近ご主人を亡くされたご婦人が喜捨をされ、椎名老師がその方の供養に大悲心陀羅尼を唱えられたところ、当婦人が涙を流して喜ばれたとのこと。まさに感応道交の世界。▼昨年末一二月二六日の例会後、第二回目のスス払い大作務を実施。参会者の熱意に深謝します。▼本誌も回を重ねていよいよ次号は、二〇号となります。丁度満一〇年目。椎名老師のご発案もいただいで、二〇号は特別記念号といたしたく存じます。詳細は別途ご案内。（杉風記）